
SecretZone

夢-むっ-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SecretZone

【Nコード】

N2403W

【作者名】

夢・むう・

【あらすじ】

「秘密」とは、他人に知られないようにすることであるが、多くの人は秘密を知りたがる。相沢和輝は、慎重な性格ではあるがごく普通の高校二年生である。ある日、和輝のもとに一通のメールが届く。そこには「秘密閲覧サイトへのご案内」と書いてあった。興味本位で開いたそのサイトにはたくさんの「秘密」が書いてあった。和輝は最初、誰かが気まぐれに作った悪ふざけのサイトであろうと思った。だが、先日学校で起こった事柄がそこに秘密として書かれているのを発見する。和輝の同級生南庄一が和輝の意中の相手、雪

村晴海に告白したことが三日も前に「南庄一が雪村晴海に告白をする」と書き込まれていた。そこでようやく、和輝はそのサイトを信用しだした。サイトで見ることもできる秘密はレベル別に分けられていた。自分自身の重大な秘密を書けば、レベルの高い秘密が閲覧できるようになっていた。自分自身の秘密を書かずとも見ることができる内容は「テストで赤点を取った」だとか「先生に怒られた」だとか、つまらないものばかり。最初はそれで満足していた和輝であったが、だんだんそれでは物足りず、友人である水野誠の万引きを書き込んだ。しかし、それでも一番高いレベルである秘密は閲覧することができなかつた。そこで和輝は、そのサイトで出会った品川雄一の自殺に協力をした。「自殺を手伝った」という秘密を書き込むと、ようやく和輝の望んでいた一番高いレベルの秘密を見ることができた。しかし、そこに書いてあったのは「このサイトはすべて実験である」であった。わけがわからない和輝のもとに大人になった庄一と誠がやって来、未来から来た研究者だと告げた。そう、和輝は実験に利用されていただけであつたのだ。それを知つた和輝は混乱したが、これは和輝が望んだことだと二人に説明され、ようやくすべてを思い出した。秘密に対する人間の考えを研究するものとして、和輝は過去の自分で実験をしていたのだ。庄一と誠はその研究仲間であつた。すべてを思い出した和輝は、妻の雪村晴海が待つ自宅へと一年ぶりに戻ろうとした。しかし、雄一の自殺を手伝つたということが世間に広まってはまずい。そこで、和輝は再び過去の自分への実験をすることを決意した。これが和輝の十度目の実験であつた。人は「秘密」に取り付かれてしまう。これが実験の結果なのかもしれない。

Secret + No. 1 (前書き)

アンハッピーエンドです。

私の好きな作者は乙ーさんです。

乙ーさんの作品を知っている方はわかるかとおもわれますが、私も少なからず彼に影響されています。

なのでハッピーエンドで楽しいというような作品とはまた一味違います。

ぜひぜひご賞味あれ。

【秘密】・・・隠して、他人に知られないようにすること。またその事柄。

毎日四十分かけ、電車と徒歩で学校に来、朝のホームルームが始まるのを机に伏せて寝て待つのが相沢和輝。あいざわかずき

「おい、和輝聞いたか？」

今日はそんな日課を自転車みずのまじゅうで十分の野誠に邪魔まじをされた。

「なんだよ。」

和輝は顔を伏せたまま無愛想に答えた。

「おいおい、朝から元気がないなあ。」

誠は呆れたような口調で、パンと筆箱しか入っていない鞆たもとを机の横に捨て置き、和輝の前の席に座った。「誰のせいだよ。」

日課を邪魔された和輝は機嫌が悪い。

「雪村さん、南庄一みなみしょういちに告られたらしいぜ。」

が、その言葉を聞いた瞬間飛び起きた。

「は？」

寝起きで視界が悪いが、目を大きく見開いて誠を見た。

「おはよう、びっくりしたか？」

和輝の額が寝ていたせいで赤いのを、指で教えながら楽しそうに誠は言った。

「いや、べつに。」

額を前髪で隠しながら、気持ちとは反対のことを和輝は言った。

「あれ、お前雪村好きじゃなかったっけか？」

なおも楽しそうな表情で誠は攻める。

「だ、誰がそんなこと言ったかよ。」

同様に隠しきれていないのを自分でも気がつきながら必死で言い訳

をした。

「ま、駄目だったらしいけどな。」

誠は、意味深な笑顔を和輝に向けた。

「俺には関係ないけど。」

白を切ってはいるが、安心した顔は隠しきれなかった。

「で、その庄一君今日来てないんだけど、どう思う？」

行動派の誠は、庄一に直接真相を聞こうとしていたに違いない。つまらなさそうな顔で天井を仰いだ。

「何でお前はそう、人の嫌がるようなことを好むかな。」

誠とは正反対な消極的で何かと神経質な和輝には理解できなかった。

「いやいや和輝くん、これは君の親友として、南のやつがどうして振られたのか知るべきではないか？」

もう一度寝なおそうとしている和輝を止めながら誠は言う。

「意味が分かりませぬね。」

あえてよそよそしく答える。

「庄一と違う告り方をすれば、成功するかもしれないか。」

どこかの評論家のような口ぶりで、完全に伏せてしまった和輝の頭を軽くたたきながら誠は言った。

「告る気なんかないよ。」

その手を払いのけながらそっけなく答えた。誠はちえ、と舌打ちをし、教室に入ってきた友人の方へ庄一の話をしに駆けていった。

和輝と雪村晴海ゆきむら せいみは中学の頃からの知り合いで、結局知り合いのままではあるが、高校からの晴海しか知らない他の男子には負けない。と、よく分からない自信を持っていた。晴海は決して世間で言う「美人」だとか「かわいい」といった容姿の持ち主ではない。が、なぜか周囲を引き込んでいく不思議な魅力がある。その魅力に、女には興味はないとしている和輝も引き込まれてしまった。南庄一はどちらかというが目立つほうではない。晴海は男女ともに評判もいい。それもあって告白などという賭け事に近いことは誰もしようとは思

わない。当然和輝もそのうちの一人なわけで、庄一の告白は衝撃的であった。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2403w/>

SecretZone

2011年10月9日14時19分発行